

Library News

図書館だより No.51
Nara National College of Technology

2001年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



(写真：体育館付近より寮方面を望む 化学工学科教授 井口高行)

目次

巻頭言「雑誌の思い出」	一般教科 福嶋 克彦	……1
読書感想文コンクールを終えて		……2
入選作品紹介		……4
心に残る1冊の本		……12
学生図書委員会の広場 (第16回ブックハンティング等)		……13
最近の書棚から		……14
図書館からのお知らせ等		……15



宮殿指示

みなさま御覧なされ
 私の指す方を
 金、硝子、玉、銀、鉄、銅、大理石
 あらゆる輝く物が掴み合って叫び合う
 灼熱したオベリスクだ
 かつと、ごちゃごちゃと空に棒立つ
 あれがすばらしい御殿だ体積十億立方メートル
 総体の色が紫だ
 日が降ると血がかかる
 総体が一つの楽器だ
 絶えずうめき鳴りきしめく
 柱に、天井に、床に、それぞれ楽器が埋めてある
 絶えないオルケストラー
 耳をすまして御覧なされ

1960年代から1970年代にかけ「何でもみてやろう」の小田実（まこと）が若者のオピニオンリーダーだった。小田実を語ることなくその時代を語ることはできないくらい大きく存在していた。私は多感な高校生だった。彼に影響されいろんな本を読んだ。確かそのころ「朝日ジャーナル」と「平凡パンチ」と「数学セミナー」が次々と創刊され、それぞれの読者層で人気をよんだと記憶している。

カエルの詩で有名な草野心平さんが、当時の「朝日ジャーナル」に村山槐多（1896～1918 明治から大正にかけて活躍した画家で詩人）の紹介記事を書かれた。冒頭の詩はそのうちの一つの最初の数節である。混沌として不可解な、そして不思議な響きのこんな詩がまだ私の頭の隅に残っているとは……。また、「大本教」をモデルにした高橋和己著「邪宗門」も「朝日ジャーナル」に掲載され、後に単行本になった。今TBSのNEWS 23のキャスターをやっている筑紫哲也さんが編集長をやっていたころもあった。小田実率いる「ベ平連」（アメリカのベトナム戦争に反対する市民運動）の人達が論客としてたびたび誌面に登場していた。そのうちキューバ危機があり、バートランドラッセル卿の仲介でケネディ大統領とフルシチョフ首相の対話でなんとか避けられた。その数年後ケネディはダラスで暗殺された。アメリカから送られたそのニュースの画像が衛星中継の最初だったらしい。後に「週刊金曜日」という週刊誌が創刊されたとき、1960年から70年代の若きリーダーたちが執筆陣として並んでいたのも、懐かしさもひとしおだった。「朝日ジャーナル」と「平凡パンチ」は30年程続いて数年前廃刊になった。創刊と廃刊がおなじ頃だったので少し話題になった。

今も続いている「数学セミナー」は矢野健太郎先生と遠山啓先生の創刊になるもので、現在も創刊当時の雰囲気は残っている。「エレガントな解答を求め」という言葉に惹かれて、問題に何度かチャレンジした。出題者の意図通りのエレガントな解答は応募できなかったが一つの問題をゆっくり考える

習慣は身についたと思っている。こんなチャレンジは学生諸君にも大いに勧めたい。

大学に入った頃から少年マンガ雑誌が流行りだした。「明日のジョー」が少年マガジンに連載されていて夕食を食べにいく食堂ではいつも読んでいた。ジョーにはライバルがいて力石徹といった。力石は病気になった。食堂で一緒になる連中はみんな心配していた。ある日、下宿のおばさんの声で起こされた「福嶋さん電話です。起きてください」。「福嶋、おまえ知っとるか、力石死んだど。」友人が力石徹の死を知らせてきた。1、2年後日本武道館で力石徹の葬式が挙行され、話題になった。思えばマンガを読む大学生のはしりだったわけである。

雑誌はその時代の文化そのものである。時には先取りすることさえある。雑誌にまつわる若き日の懐かしい思い出の一コマである。

平成12年度 読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

第25回読書感想文コンクールの審査結果を発表します。図書館委員会と国語科教官による審査を経て、応募総数357編の中から、次の最優秀作1編と優秀作8編が入選となりました。ここにその氏名と共に記し、栄誉を称えます。

最優秀

電気工学科3年 玉井芳英 「罪と罰」を読んで

優秀

機械工学科1年 大野雅也 「坊ちゃん」を読んで

電子制御工学科1年 中窪実 「沈黙」を読んで

情報工学科1年 小西郁江 「銀河鉄道の夜」を読んで

情報工学科2年 青山瑠美 愛について死について-「愛と死」を読んで-

情報工学科2年 小川優 「燃えよ剣」を読んで

物質化学工学科2年 瀬川瞳 「君の絵じゃダメだね(仮題)」読んで

物質化学工学科2年 辰巳哲馬 「世界の教科書は日本をどう教えているか」を読んで

物質化学工学科2年 増田幸平 「古城の迷路」を読んで

また、惜しくも入選とはなりませんでしたが、審査の過程で高い評価を受け、最終選考まで残ったものは、以下の列挙する諸君の作品です。

1 M 川崎 賢宏	1 M 安田 翔	1 E 小林 祐介	1 E 野山 大彰
1 E 吉岡 佑規	1 S 土江 進太郎	1 S 土居 優太	1 I 市川 まどか
1 I 杉本 真崇	1 I 須藤 慎平	1 I 田部 博之	1 I 柘田 実恵
1 C 大山 恵奈	1 C 小林 由季	1 C 多賀谷 修平	1 C 前川 佳史
2 M 木下 和哉	2 M 中野 宏樹	2 M 森本 雅憲	2 M 安田 和貴
2 E 大瀬 傑	2 E 小池 のぞみ	2 E 田中 宏幸	2 S 上谷 巧
2 S 田中 淳也	2 S 広田 彰吾	2 I 坂上 綾	2 I 中島 絵美
2 I 林田 翔太	2 C 竹内 絵里子	2 C 茂浦 敬志	2 C 山下 大介
3 M 井上 洋	3 E 西田 貴		

以下、恒例に従い、入選作の幾つかについてコメントします。

最初に特筆したいのは、最優秀作に選ばれた3E・玉井君の作品について。選んだ対象のレベル、文章の明晰さ、共に申し分ありません。奈良高専国語科の教官として、このレベルの読書感想文を書ける学生が本校にいることを誇らしく感じます。ただ、相手が、一昨年に次いで二度目の最優秀作に選ばれた玉井君だということで、敢えて高い水準の批評をするなら、玉井君の捉えているドストエフスキーは、余りに合理的で明るいように感じます。この偉大なロシアの小説家の魂には、もっと非合理的な「闇」が存在しています。その「闇」に一步迫ってほしかったと感じます。時間があれば、次は是非「カラマーゾフの兄弟」にチャレンジして下さい。

玉井君の作品に次いで高い評価を受けたのは、2I・小川さんの作品でした。特に、司馬遼太郎の歴史小説を読んで受けた感動を、率直に過不足なく文章化している点に、非常に好感が持たれます。玉井君の作品との評価の分岐点となったのは、玉井君の文章がすっきりとした「である・だ」体であるのに対し、少し「緩んだ」感じがするのと、あとは、対象として読んだ作品のレベルであったのではないかと思います。文章的に同じ出来なら、どうしても「名作」「問題作」と言われる作品について書かれたものの方が評価が高くなります。しかし、高専は小説家や文学研究者を養成するための学校ではありません。高専生にとって読書は、多く「教養」のレベルで止まるものでしょう。諸君は、自分の「身丈に合った」本を選べばよいのだと思います。ただし、それはレベルの低いマンガ本でよいのだという意味ではありません。もしよい機会だと思えば果敢に「名作」と呼ばれるものにもチャレンジすること。そういう点で、1年生ながら遠藤周作の「沈黙」を選んだ中窪君には、文章的には未熟さも目に付きますが、拍手を送りたいと思います。

もう一つ、昨年に続いて武者小路実篤の作品を選んで入選した2I・青山さんのものも、明瞭に自分の考えが締まったしっかりした文章で述べられており、印象に残りました。ただ、作品について直接述べた部分が少ないため読書感想文らしくなくなってしまったのが残念です。

また、2C・辰巳君のものは、対象として「文学作品」ではない本を選んでるのが参考になると思います。読書感想文という、つい「文学」、それも「小説」を読まなければと感じがちですが、奈良高専の読書感想文コンクールはもっと「開かれた」ものです。過去にもいわゆる理系の本に対する感想文で入選した人も多くいます。今回最終選考に残ったものの中にも、「YS-11」とか「太陽電池を使いこなす」というようなタイトルの本を対象としたものが含まれています。そんなのも「高専らしくて」いいんじゃないかな？

入選したその他の人たちの作品にも個別적인コメントをしたいのですが、スペースの都合でそれは出来ません。ただ、それぞれ立派な作品であることは、それらが多くの先生方に評価され入選したという事実それ自体が物語っています。立派な作品をどうも有り難う。

(国語科・勢田)



受賞されたみなさん

入選作品紹介

ドストエフスキー 著

「罪と罰」を読んで

電気工学科3年 玉井 芳英

ラスコーリニコフは、なぜ金貸しの老婆を殺したのだろうか。自分を確かめる為の犯罪というには、あまりにも深く、あまりにも重すぎるこの作品の中で、ドストエフスキーはいったいなにを訴えたかったのだろうか……。

当時のロシア社会がどのような状況であったのかは、今の僕には知るよしもないが、この作品から読みとれることは、多くの人々が貧窮と闘いながらのギリギリの生活を送っていたということである。そして、ドストエフスキーは、この一番底辺の人々に目を向けて読者に何かを訴えたのだ。それは、国民をこんなにもまで貧困にさせている政治家への不満か。あるいは、インテリと呼ばれる人々の裏に隠されたもう一つの顔なのか。あるいは、当時の女性の虐げられた社会的立場なのか。これらすべてを飲み込むほどの底知れない大きなものが、この作品にはうづまいてるとぼくは思った。

まず最初に、この作品に目を通してとても興味をひかれたことは、登場人物のすべてが善人であるということである。悪人だと思われたルージンの卑劣なまでの言動も、ドゥーニャに寄せる思いだと考えると、それほど悪いやつに思えなくなってくるから不思議だ。また、ドゥーニャに思いを寄せていたスヴィドリガエルフも、確かに彼のドゥーニャに試みようとした行為は許せないが、その内面は純粹で、ドゥーニャへの思いは本物だった。勿論、老婆を殺した主人公のラスコーリニコフは、悪人とは言いがたい人物である。彼は貧しいながらも勉強に励み、将来は法律家を目指す前途有望な大学生であった。彼は、決してお金欲しさに老婆を殺したのではない。彼の説明によると、「人間は、すべて凡人と非凡人の二種類にわかれる。前者は、普通の道徳と法律に従って生きねばならぬが、後者は、それを踏みにじる権利を与え

られている。例えばナポレオンは、多くの人々を殺したが罪にはならず、むしろ英雄として世界史上に君臨している。目的が善ならば、手段は悪でも是認されるのだ。そして、自分が凡人なのか、非凡人なのかを確かめる為に老婆を殺したのだ。しかし、結局僕が殺したのは老婆ではなく自分自身だったのだ。」と述べている。このナポレオンの考え方は、どこか現在の若者たちに似ていないだろうか。十代の若者が新聞紙上を賑わしている昨今、彼らの動機は今ひとつ伝わってこない。結果として犯罪を犯した若者たちの抹殺したものは、彼ら自身の人生なのである。青春ゆえの産物、ナポレオン。これは、時代を超えてすべての人を豹変させる恐ろしい力を持っている。ドストエフスキーは、読者である僕らにラスコーリニコフを通して、ナポレオンの罪深さと、本当の意味の罪とは、自分自身の中に存在するものだと教えたかったのではないか。

次に、僕の興味をひいたことは、ソーニャの存在である。ドストエフスキーは、彼自身の理想の女性像としてソーニャを作り上げたのだと思う。そして、この女性像はどんなに流れようとも、どんなに国が異なろうとも、世の男性達の憧れだと思ふ。ソーニャは黄色い鑑札を持つ娼婦である。しかし、彼女の行為は家族を貧困から救う為の手段であり、その魂は信仰によって輝いている。

ソーニャにより、ラスコーリニコフの心は少しづつ癒されていく。ソーニャの存在は、この作品の唯一の光であり、そこにロシア人でありながら西欧のキリスト教を信仰をしていたのではないかと思わせるドストエフスキーの自由主義の一面を垣間見たような気がした。最後に、ドストエフスキーの訴えたかったは何だったのか。人類の歴史を振り返ってみると、何とナポレオンの多いことか。そして、これから先も無数のナポレオンが存在するであろう人類の歴史に、彼は「罪と罰」という課題で警告を与えているのではないだろうか。

夏目漱石 著

「坊っちゃん」を読んで

機械工学科一年 大野 雅也

この作品を読んで、まず登場人物の個性の強さが面白かった。話し方、笑い方などの細かいところに、それぞれくせがあって、性格がよく表れていた。主人公のべらんめえ調の江戸弁と、生温い感じの方言との会話も独特な感じだった。

主人公の周りで次々に事件が起こるが、「誰が一番悪いのか？」というのは、読んでいても後半にならなければ分からない。だから、つい夢中になって読んでしまった。特に、主人公と山嵐が仲直りする場面は強く印象に残った。やっと自分の味方が誰なのか分かり、もやもやしたものが晴れたら、こっちまでスカッとした。

赤シャツと野だのやり方には、さすがに腹が立った。それに従う周りの教師もどうかと思うが。主人公の真っ直ぐで正直な性格からすれば、本当に腹の立つ毎日だっただろうと思う。

主人公の心理の移り変わりを読んでみると、なかなか面白い。ちょっと乱暴な言い方ではあるけど、共感できるので思わず笑ってしまうようなところもあった。

主人公対赤シャツも本格的になってきて、主人公と山嵐がけんかに巻き込まれた後、それが原因で山嵐が辞表を出すはめになってしまうことを聞いた主人公が、「何で私に辞表を出せと言わないんですか。」と、校長を問い詰めた場面は、主人公の「曲がったことが嫌い」という性格がよく表れていた。こうなりたいものだと思った。現実には、この主人公のような人はいないと思う。ほとんどが赤シャツや野だのような人間だろう。僕もどちらかと言うと、赤シャツのような人間なんだと思う。ひそひそと悪口を言ったりはしないが、これほど正直に生きることはできない。

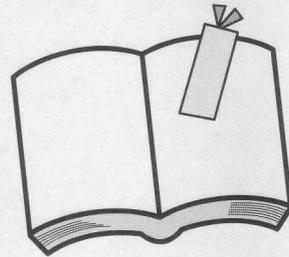
主人公と山嵐は、最終的には赤シャツと野だに仕返ししたが、結局、学校を出て行くことになりはなかったのだから、結果としては負けたことになるんじゃないだろうか。赤シャツと野だは、何もなかったかのように、二人がいなくなった学校で今までどおりの生活をしているのだろう。主

人公は、何も変えることはできなかった。

やはり主人公の居るべき場所は、清のところだったのだと思う。主人公にとって、清の存在はなくてはならないものだったのだろう。

正直に真っ直ぐに生きることは、簡単なことではない。主人公のような生き方に、僕はすごくあこがれてしまった。でも、彼はその生き方を受け入れてくれる清という存在があったからこそ、自分の生き方として貫くことができたんだろうと思う。清は主人公をいつも誉めていた。何故なのか、深くは分からない。でも、清は、主人公にとって自分の理想の生き方ができるたった一つの場所だったのだろう。

自分の考えた通りに生きることは、たとえそれが正しかったとしてもとても難しいということ、この本を読んで知った。単なる、「正直な人間が最後に勝つ。」という小説ではなかった。でも、読み終えたらスッキリした。



遠藤周作 著

「沈黙」を読んで

電子制御工学科1年 中 窪 実

とうとう、セバスチャン・ロドリゴの足下に踏絵が用意された。彼は最後まで苦悩し続けた。キリストを愛し、信じる心の強さゆえの苦しみだろう。だが、キリストは、「踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。(中略)私はお前たちの苦しみをわかちあうそのためにいるのだから。」と、彼に優しく語りかける。大げさかもしれないが、そんなロドリゴの信仰する心の強さと、キリストの偉大さを感じさせる愛に、僕は心を打たれた。また、普段から自分が信仰しているはずの、仏教についての意識の薄さが恥ずかしくなった。

そもそも、この話は、信仰に熱心で地位も高いキリストヴァン・フェレイラ教父が日本で「穴吊

り」という拷問をうけ、棄教を誓ったという報告がローマ教会に入ったことから始まる。そこで、その真偽を確かめるべく、ロドリゴを含む三人の司祭が日本に派遣される。この時、彼らはフェレイラの棄教した姿だけは望まなかったに違いない。信仰でつながっている彼らにとって、仲間と呼べない仲間に出会うことほど、つらいことはないと思う。それぞれの思いを心にひめながら、日本に向かった彼らだが、島原の乱直後のため、キリスト教禁止がきわめて厳しく、事情に事情が重なり、結局、ロドリゴ一人になってしまう。しかし、彼だけはフェレイラに出会うことができた。ただし、孤独に苦しむ変わり果てた姿だ。しかも、ロドリゴが吉次郎という男にだまされて捕まった後の話だ。そして、最終的にはロドリゴも、フェレイラなどにせかされて棄教してしまう。

だが、それでも彼は、神を信じることをやめなかった。これには、かなり驚いた。彼がとても慕っていたフェレイラに、いくら説得、批判されても、なかなか棄教せず、踏絵を踏んだのも、神の言葉を信じたただけだった。僕などは、読んでいるときに、すでにフェレイラの言葉を心でうなずいていた。僕が、ロドリゴの立場なら神の声は聞こえず、自分を助けてくれない神を恨み、二度とキリスト教を信じることはできなかつたろう。他のキリスト教徒、例えば吉次郎の立場なら、吉次郎と同じように、ロドリゴを役人に売るだろう。僕の罪の心は罰の心に勝てないようだ。そして、ロドリゴの心と比べると、信仰する心は、これほどまでに人の心の強さを左右するものなのかと、改めて驚嘆させられた。

また、神の愛とは想像以上に素晴らしいと思った。僕たちは、祈りやお金という特別な事をして、神の愛を得ることが多い。だが、ロドリゴは、踏絵を踏む少し前までは苦しんでいるだけだったし、直前も、信じるという当たり前のことをしていただけなのに、神の愛を得た。以前、無償の愛という言葉聞いたことがある。ロドリゴが得たものはそれだと思う。対して前者は、有償の愛だと思う。それはただある行為に対してお返しをするという当然のことだが、が、後者は、自ら身を

削らず、他方から幸福を得ている。人と人との間でこれが当然なら、今ごろ世界は平和が広がり苦しみを分かち合い傷つけ合うことはないはずである。この二つの違いは、仏教とキリスト教の根本的な観念の違いで、どうしようもないかもしれない。ロドリゴのような熱心な司祭が、いくら「主を信じなさい。」と言っても、吉次郎のような人間がでてくるのは無理もない。しかし、それでも日本には、無償の愛という考えが、もっとも必要だ。それをなくしても、時々、そんなことを考えたと思う。それにしても、平和をもたらす愛を無料でくれるのはキリストの偉大さだと感じた。ただ読んでいくうちに、神はロドリゴ自身に思えた。僕には、神がしゃべるということの中に、良心の塊である、もう一人のロドリゴを神の顔に重ねていたのではないか。それなら、神がしゃべっても、あまり不思議ではない、これも信じる心の強さゆえであり、もちろん、ロドリゴ自身、そうすることによって困難に打ち勝ったと思う。

宮沢賢治 著

「銀河鉄道の夜」を読んで

情報工学科1年 小西郁江

まず、この話を読んでいると頭の中で、いろいろなイメージがわいてきました。自分が今満天の星空の中で、ジョバンニやカムパネルラと同じ銀河鉄道に乗っていて、きらきらと移り変わる景色を眺めているイメージです。私は銀河鉄道の世界は、実際に生きている世界ではなく、死んでいく人の通過点、もしくは生きていることに悩んでいる人が行き先を決めるための場所、そういう世界だと感じました。ジョバンニは、実際の世界では、父親のことをみんなにはやしたてられ、信じていたカムパネルラともなんとなくうまくいかず、そんなイライラや情けなさが、心のどこかで溜まっていたのでしょうか。カムパネルラも、何を悩んでいたかは、よくわからなかったけれど、彼なりにいろいろなことを考えていたのだと思います。そして、そんなはっきりとはわからない思いがこの物語の中でなんともいえない不安定さ、明るさの中にある影の部分のようなものを生み出している

のだと思いました。この物語を読んでいて、ずっとついてくるような気がしたどことない寂しさや、何かが抜け落ちたような気持ち。それは、現代の私たちが生きている世界で多く感じられるものではないでしょうか。人と人がふれあうことも少なくなり、殺伐とした社会の中で生きていく人々の心の荒廃、最近テレビなどで言われる子供の犯罪など、なにか寂しげでせつなくなるような気持ちは、私が感じたこの物語と今との共通点のようなものでした。

しかし、そのような気持ちも銀河鉄道に乗っていると吹き飛びそうなものになあ。現世のことを忘れて幻想的な世界に浸る。果てしなく続く旅の末には何があるのか、そんなことは考えずに、ただ列車に揺られている。そんな生活に少しの憧れを感じたりしました。

そして、列車に乗っていた2人は別々の道を歩みだします。ジョバンニはやはり生きていかねばならないから、生きたいと思ったから銀河鉄道から降りたっていきました。一時の休息、夢の中の幸せ、銀河鉄道はそのようなものだったのでしょう。でも、ジョバンニは、そんな中で生きるための目的、意気込みのようなものを発見したのでしょう。私は彼が気付いてないけれど、頭ではなく心でそれを感じたのだと思っています。また、ジョバンニとは違う道を選んだカムパネルラ。現世では、川に落ちたといわれているけれど、私は、彼は、銀河鉄道で永遠の旅にでたのだと思っています。果てのない永遠の旅、その中でもしカムパネルラも何か見つけられたら、その時は再びジョバンニのところに帰ってくるかもしれないと私は思いました。そして、私もこれから生きていく上で、ジョバンニが見つけたもの、カムパネルラが探しているものを見つけないと思いません。私は、まだそれを探す旅を始めたばかりです。だから、これからじっくりと、それを見つけないです。そんな中で、この本は、これからの小さな道標となってくれた気がしました。



武者小路実篤 著 「愛と死」

愛について死について

情報工学科2年 青 山 瑠 美

昨年の「友情」に続いて武者小路実篤著の「愛と死」を読んだ。

愛という感情について思ったこと。愛というのは、ただ、「好き」という言葉に代表される複数の者共同士の平穏なやり取りだけでは囲いきれない巨大なものだと思う。「好き」があるからこそ「嫌い」がある。それも「愛」の範疇にあるはずだ。「愛」があるから自分を迫害する者を憎むことも出来る。様々な感情を生み出すことが出来るのだ。ほんの少しの刺激を与えるだけで。

「愛」が発動する原理は単純である。むしろ、人は常にそれを発動させ、理性と本能との間に差し入れてしまい苦しんでいる程かも知れない。「愛」は理性とも本能ともつかないように思う。人の「愛」を主にして論じているからそう思うのである。例えば誰かが他人を愛したとする。その人は相手の支配、独占を夢見る。この所は本能のようであるように思う。しかし、人は他人を慈しみ、守ろうとすることがある。本能だけでは、言い尽くせない、第三者から見れば美しいとすら感じるような現象である。

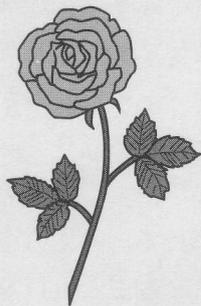
人の様々な行為が「愛」に関連付けられるということじつげも出来そうなものである。賛否両論起りそうである。しかし私はそのように思う。「愛」の中には普段人が忌み嫌う自己中心的思想も含まれており、自己愛と呼ぶことも出来る。人が「愛」を捧げる対象も、他人だけに限らず物であったり異種族であったりもする。「愛」というのは、論じて後悔するほど、不可思議でつかみ所のまるでない、人に一生付きまとう苦悩の種なのだった。

ところで、「死」についてであるが、私は少数回人の死を目にした。父の死と祖母の死である。「死」は決して悪ではないのにもかかわらず、生きている者共が嫌がるのは何故だろうか。恐れもする。私は小さい頃「怖いという感情の対象は自分外理解できないもの」という説を読んだことがある。確かにそれはそれとして認められるだろう。しかし、自らの生存の危機に関することへの恐怖

とは違うと思うのである。

愛する者が死んで悲しむのに、「あなたを失った私は一体どうすればいいの」とか、「あなたが居なくなったら私、もう生きていけない」とか言うような台詞が多いように思う。人は、愛する者が傍らで息をしているという事実によって辛うじて自分を保つようになることもあるので、他人が死んだ時も自分のことばかり考える。「死」は遅かれ早かれ必ずある一大イベントのようなものだと思うので、それを迎えた人は絶対に不幸だとは言えないのである。「死」が悲しく不幸で縁起の良くないものであるという考えは生存者達の間でしか通じない。死ぬのが嫌だというのもその者が幸せと感じ元気な時だけである。生きることに絶望すれば誰しも「死」を思うのである。

この物語のように、病という不可抗力に屈した場合も、愛するものと最期に会えなくともあっさり死ねた。そう、人生とは濃口というよりは薄口な方だ。可哀相だと思うのは周囲だけ。本人の気持ちなど永遠に分からないが、「死」は決して不幸ではないと思うのだ。生存者が不幸と思う。



司馬遼太郎 著

「燃えよ剣」を読んで

情報工学科2年 小川 優

私は、本や映画などで感動することがあまりないほうだったのですが、この作品は別でした。読み終ると、感動で涙が出そうでした。私はこの本を読むまで、幕末に関しては学校の歴史の教科書に載っている程度の知識しか持っていませんでした。新選組も単なる単語としてしか知らず、この本の主人公である土方歳三は名前さえ知らない、という始末です。なぜもっと早く読まなかったのでしょうか。読んでみて感動すると同時に、中学生の時に読んでいれば歴史の授業がもっと楽しく

なっていたら、と多少後悔しました。

たくさん見所があるなかで、私がまず強く感動したのは、主人公である土方歳三の生き方です。彼の生き方を考えると、人の生き方にお金や名誉や地位なんてものは、大した意味を持たないような気がします。彼の人生を通して、そんなものがあったらいい何か役に立っただろうか、という思いになるのです。彼の欲望は、もっと別のところみ向けられていたのでしょうか。彼の一生にあったのは、自分の信念を貫くことだけだったように感じます。死ぬ瞬間まで、自分が信じた道のみを行くというのは、そう易々とできることではありません。そんな彼の生き方に強い魅力を感じたのは、私自身がそう生きたいと願っているからでしょうか。それとも、私がそうは生きられないと分かっているからでしょうか。どちらにしろ、土方歳三が私に強い衝撃を与え、生きることに本当に必要なものは何なのかを考えさせたというのは確かです。

心に残った人物が土方歳三だとすると、心に残ったエピソードは池田屋事件でしょうか。新選組が最も華やかであった時期に起こったから、というのも理由の一つですが、なによりこの事件後の展開で幕末という時代やその時代における新選組の位置がよく見えたからです。この事件により新選組が歴史に与えた影響は一時的なものに過ぎず、結局のところ新選組は、変ろうとする時代の流れに逆行することとなり、滅びていく、という普通に考えれば「哀しい」結末を迎えます。しかし、私は彼らから悲壮感や絶望感を感じることはできませんでした。それはやはり、新選組が土方歳三と同様に己の信念を貫いたからなのだろうと思います。全く羨ましい限りです。

ここまで、新選組や土方歳三の信念への感動しか書いていませんが、この本の感動はそれだけに限りません。土方歳三を主体として書かれているために、官軍や、江戸城を、無血開城した徳川慶喜は良く書かれていません。それで気付きにくくなってしまったのですが、彼らも新選組も自分達の信念を貫いたことに変わりはないということは、文章の端々から感じられました。そして、私はどちらの信念が正しいわけでも間違っているわ

けでもないのだと思いました。彼らにとって重要なのは正否ではなく、自分の信念に殉ずることのみだったのでしょう。今の時代では考えられない激しさを彼らから感じました。私がこの小説に惹かれた真の理由は、敵味方に関わらず人々それぞれが自分の信念を通すために戦っていたところにあるのかもしれませんが。

様々な信念が交錯した幕末という激動の時代を、新選組という立場のみから判断してしまうのは大変もったいないことだと思います。他の視点、例えば官軍や維新志士、幕府の要人などの立場から幕末を見れば、きっと新しい感動や発見が見えてくるのでしょう。

326 (ナカムラミツル) 著

「君の絵じゃダメだね(仮題)」 を読んで

物質化学工学科2年 瀬川 瞳

「どんなに友達がいても、なんか自分はひとりぼっちなんじゃないかって不安になる。だけど君だけじゃないよ、安心して。みんなそれを持って生きている。」

ナカムラミツル。彼の言葉すべてに共感できたし、自分が生きていく上で抱えている疑問符は特殊なものではないということに気がついたら、少しだけ気持ちが楽になった。夢をみさせてくれない時代、夢をみることを忘れた人。これらが共存する世界に私は生きていて、そんな時代に生まれ落ちてしまった事に戸惑いを感じるようになったのは今に始まったことではない。いつだって自分らしく在りたい。だから私達は自分なりの結果を残すために努力する。自分の考えを誰かに認めてもらいたいのが故に。しかしヒトはそれを受け入れてはくれない。「そんなもの世間に通用するとでも思っているのか。」とでも言うかのように嘲笑うのだ。私は教えられたようにさえすれば評価される現実に納得できなかった。そしてたとえ結果がすべてだとしても、その努力だけは認めてもらいたかったのだ。

数ヶ月前に少年のバスジャック事件があった。彼は「ヒトを殺したら誰もが自分に注目してくれると思った。」と言っていたが、その気持ちは私にだって解らなくもない。友達と共に笑って過ごす毎日の中で、何処かに笑えない自分がいて、「私の存在価値ってあるのだろうか。」と不安になる。自己嫌悪することと、自分を責めることでしか己の存在を確認できなかった。著者もきっとこう感じたことがあったから、あの言葉を私たちに与えてくれたのだと思う。

誰からも必要とされなくなることの恐怖感に襲われ、実際にその冷たい風が自分の身体に触れるのを感じてしまった瞬間、人の心の精神コンピュータは強制終了されるものだと私は思う。その事実を受け入れることほど、残酷なことはないだろうから。そしてコンピュータが再起動したとき、もうそこには正気の自分はおらず、少年のように罪を犯してしまうのだ。

「リセットボタンガコノ世ニ存在シナイ事、アナタハ知ッテイマシタカ？」

と精神コンピュータを強制終了させたもう一人の彼はそう尋ねたが、もう手遅れだったのだろう。

以前の私の精神状態のままであれば、もしかしたら自分の精神コンピュータが強制終了されるのも時間の問題だったと思う。しかし著者に、人に認められることが全てではないということを教わったような気がして、考え方を変えることができた。人に認められることだけを目的とした夢なんて本当の夢とはいえない。誰に何といわれようと自分が正しいと思ったことを信じて、走り続けることに意味があるのだ。そして努力は自分自身が認めてあげればよいと思った。決して無駄にはならない。その努力はいつか実るだろうし、たとえ実らなかったとしても生きていく糧になると思えば、失敗を恐れない強い人になれるだろう。夢を追いかけている人はいつも輝いていて、「素敵だな。この人にならついていてもいい。応援したい。」という気持ちにさせてくれる。本当の夢を持っている人には自然と支持者が集まるのだ。時はヒトに夢を与えることを知らず、欲と金を与えて私達を飼い太らせて、次第に汚れていく人間は

互いに傷つけあい、戦いを繰り返す。こんな時代でも強い光を放って輝く人を私は憧れている。そしてそんな人がこの世の中を変えてくれると私は信じている。

「一人でも多くの人間がヒトから人に変化すること。」これが私の小さくて大きな希望、いや、夢なのかもしれない。

別技篤彦 著

「世界の教科書は日本をどう教えているか」を読んで

物質化学工学科2年 辰巳哲馬

国際社会と言われる時代、日本はどのように見られているのか、それは大変興味深い事であり、大切な事でもある。特に僕が興味を持つ点は、外国人の視点による、日本の地理的条件、日本人の性質である。これは私達がアメリカは五十州からできていて、東にアパラチア山脈、西にロッキー山脈があり、キリスト教を信仰する人が多いと理解しているように、外国人は私達の事をどの位理解しているかという事である。しかし、私達も完全に外国を理解できているわけではないと思う。ともかく、私達が外国と理解し合う事は重要な事である。

私達日本人は私達が思っているほど、実は外国人に知られていない。例えば、一九七八年、ECの外交官ウィルキンソンが調査した西欧諸国の高校生の意識調査では、過半数の生徒が日本は中国の一部であると解答したり、フランスの大学生達にはトルコの隣国にあるとか、また、かなりのジャーナリスト達からは日本は南半球の熱帯圏にあると、つい最近まで信じられてきた事が挙げられる。しかも、こんな記述までイギリスの教科書にあったのだ。

『家の中には家具がない。』

それに対し、近年は日本の急速な発展に対し、これを日本人そのものの特質に求め、ことに労働者の教育レベルの高さを示す事が多くなってきている。

『日本の産業では、労働者の質の高さこそが最大の資源である。彼らのエネルギー、適応力、技

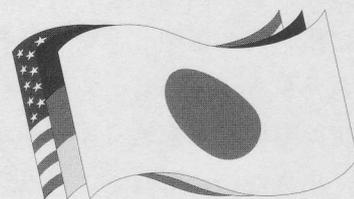
術の優劣性などがあり、絶えず新しい技術の開発につとめている。その基盤をなすものは、教育の高さであり、江戸時代から日本の教育は驚くほど普及していた。』

また、これらに対し、私達日本人は、外国の事をわかっているつもりだが、実は分かってはいない。日本の地理の教科書をドイツのと比較してみると、日本の教科書は世界のあらゆる国をもれなく記述しているが、内容は、わずか数行で片づけられている事が多い。日本のある教科書は旧西ドイツをわずか二ページで扱っているにすぎないが、ドイツのある教科書では総ページ数百七十六ページのうち、日本はケーススタディとして八ページも費やされ、内容もきわめて豊富である。また、ドイツの教科書のように重点的、主題別の教育に対し、日本は、単なる事項の羅列である事も、私達の外国人に対する理解を分かりにくくしている。

正直、外国人が私達の事を正しく理解していないのに驚いた。これは逆にも言える事かもしれない。その原因は誤った内容による教科書からの知識による事が多いと思われる。事実、教科書によって誤った理解を持っている外国人はたくさんいた。このように、誤解を招かぬようにするには、教科書の執筆者は常に世界を見つめていなければならないと思う。対外関係における誤解は、時に大きな事態に発展する可能性を持っているからである。

そして、日本に対する外国の尊敬、そして自国の誇りを傷つけぬように、私達は常に努力を惜しまず、外国と助け合わなければならないと思う。そのためには、互いに理解しあう必要がある。

日本の教科書では、単に事項を羅列し、暗記するだけの記述でなく、一つの事柄に対し、興味を持たせ、理解を深めていく教育というものがこれから必要になっていくと思う。



ドロシー・ギルマン著

「古城の迷路」を読んで

物質化学工学科2年 増田幸平

この本を読もうと思った理由は、タイトルの「迷路」という部分に興味を持ったからだ。何が迷路なのか——どんな「迷路」があるのか——と。その「迷路」とは心の中であって多くの人がそこで迷っているという事だ。

この話（つまり「迷路」）は、ある平凡で幸せに暮らしていた（暮らしていけたであろう）少年が両親を疫病で失ってしまう事から始まる。両親は特に悪人だったという訳ではない。むしろ善良であった。なぜ善良な人間が死ななくてはならないのか。そしてなぜ彼自身もまた理不尽な苦しみを受けるのか。彼はこの世の不条理性に強い憤怒を抱き、その解を求めるために古城にあるという迷路に入った。

迷路（ここでいう迷路とは心の中にある迷いの隠喩的表現であろう。）にはいくつものトラップ（ここでいうトラップもまた、一般的に想像しがちな実際に手足を拘束する様な物ではない。感化される様な——。）があった。

枚挙にいとまがないので印象に残ったものを書きたい。実は彼が入った迷路には正規の出口がなかった。先に迷路に閉じこめられていた人々が異口同音にそのように証言するのである。彼は信じたくなかった。否、信じなかったのである。そして彼は一見無法にも思えるが迷路の壁を直接に乗り越えるという荒業で脱出した。

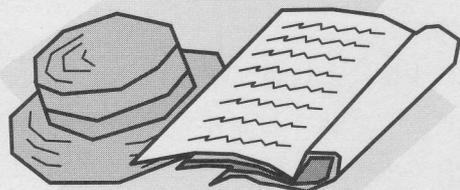
おそらくこの部分は、何か具体的な事実（この話で言うなれば両親を失った悲しさ）にこだわり、その事を無理にでも解決しようと思うか、若しくは悲しみにこだわる余り何も手につかなくなっている状態だと思う。迷路に先に閉じこめられていた人々は、彼らの悲しみを歌にして毎日悲しみに明け暮れる日々を送っていた。現実迷路を用意されて「この迷路には出口がないけれど壁を飛び越えれば外に出られるよ！」と言われれば今すぐにも出来ると思う。しかし、心の中にある迷路はなんとも質の悪いものだろうか。簡単に飛び越える事なんて出来ない。それどころか、多くの場

合ここで足止めされてしまう。彼はここで一つの同じ事を悩みつづける訳にもいかない事を理解したのだと思う。

彼ら同じ事を悩みつづける人々は彼が迷路に入って最初に会ったタイプの人だ。その後、彼は親切心の無い人々等の多くのタイプの人々と出会い、時には感化される。「もう十分に居心地がいいからこのあたりで旅をやめよう。」と。しかし、彼はいつも裏切りを受け初心を思い出して旅を続ける。

一番印象に残った部分は、彼が「虹を作る男」に会った事だ。彼は虹を作る事に挑戦したがうまく出来なかった。そして「虹は作り出すものではなく築き上げる物。」と言われる。その後、男にごちそうを振舞われて彼は「人生がずっとこうだったら良いのに。」と男に言った。すると男は「どうして人は苦しい事ばかり思い出し、楽しかった事を忘れてしまうのか。」と言ってごちそうと共に消えてしまう。彼のように不条理な出来事があると人間は楽しかったときの事を本当に嘘のように忘れてしまう事をこの部分は思い出させてくれた。

不条理性の追求をするために彼は迷路に挑んだ。この迷路は誰にでもあり、多くの人がこの迷路を通して成長するのだと思う。右顧左眄し不条理性を追求する事こそ生きている証なのではないでしょうか。





心に残る一冊の本

〈あなたにも薦めたい〉その11

最近読んだ小説 【沈まぬ太陽】

山崎豊子 著

情報工学科 世古 忠

新聞の書評欄で目にとまったこの本のタイトルに惹かれて、近所のブックストアで「アフリカ篇」((上)、(下)) 2冊を手に入れ読み出した。まもなくこの小説はただならぬ「真実の物語」であるなど直感した。以来、「御巣鷹山篇」、「会長室篇」((上)、(下))と続く全5巻を一挙に読み終えた。この小説は「現代を抉(えぐ)り人間の真実を問う」(帯封のキャッチフレーズ)傑作であり、書店のベストセラーの一角にランクされ続けているのもうなずける。

「アフリカ篇」は主人公の恩地 元(おんち はじめ)がアフリカの大地、ボイ狩猟区に四輪駆動車で出かけるシーンから始まる。まもなく恩地がなぜナイロビに駐在しているのか明らかになる。恩地は入社まもなく、はからずも航空会社の労働組合中央執行委員長に選出され、利益優先の会社と対峙して「空の安全」と航空労働者の擁護のため努力する。そのため会社は懲罰人事で恩地を10年間も家族と引き裂きカラチ、テヘラン、ナイロビへと左遷したのである。恩地は沢泉委員長らの粘り強い努力の末10年ぶりに日本へ呼び戻されるが、航空会社はまもなく大惨事を引き起こすことになる。

「御巣鷹山篇」は、今から15年前羽田から大阪伊丹空港へ向かう日本航空JAL123便ジャンボ旅客機が乗員乗客524人を乗せ行方不明になり、遂に長野県の御巣鷹山(おすたかやま)山中に墜落し520人の犠牲者を出した大惨事の綿密な取材にもとづくドキュメントである。事故当時のボイスレコーダの記録が生々しく再現されるなど、「本当の事故原因」を究明しようとする作家の姿勢はエンジニアのようである。墜落する飛行機の中で妻子に書き残した河口さんの遺書を読み私は胸に迫るものを感じた。

「会長室篇」は、航空会社幹部の不正と乱脈、政官財のゆ着など現代社会の闇部が描写される。恩地は、会長室長に任命され会社の立て直しのため活躍するが、会社は恩地を警戒し3度目のナイロビへ支店長として左遷する。しかし、恩地は自分の信念をまげずナイロビに赴任し勇気ある人生を歩む。

この小説は人間とは何か、人間にとって何が大切かを真正面から問いかける傑作である。

【I, ROBOT わたしはロボット】

アイザック アシモフ 著

電子制御工学科 押田 至 啓

科学者のひとりであり、科学解説者でもあるアシモフが、1939年以来発表したそれまでの9編の短編を1950年にまとめたのが本書である。物語はしゃべることができるロボットが製造販売される2003年前後の時代を想定してかかれており、ちょうど今現在我々が身を置いている時代およびこれから迎えようとしている時代に対応している。一連の物語は、アシモフの科学技術への考え方もいえる次の「ロボット工学の三原則」をもとに、ロボットという媒体を通し、人間としての生き様を表現している。

「ロボット工学の三原則」

1. ロボットは人間に危害を加えてはならない。また何も手を下さずに人間が危害を受けるのを黙視してはならない。

2. ロボットは人間の命令に従わなくてはならない。ただし第一原則に反する命令はその限りではない
3. ロボットは自らの存在を護らなくてはならない。ただしそれは第一、第二原則に違反しない場合に限る。

アシモフはこの物語の中に登場する人間味あふれるロボット、人間よりも人間らしいロボットを通して、この「ロボット工学の三原則」すなわち彼の科学技術に対する考え方、ひいては人間としてとるべき姿勢を語りかけている。本書はSFとして50年前に発表されたが、彼の描いた時代が現実のものとなった現在においてもこの基本的な考え方は何ら変わることがないと思われる。これは遠い将来、「昔こんな風なSF作品があった」と語られる時代になってもおそらく変わることはないであろう。

わたしがこの作品を初めて読んだのは20数年前の学生時代であったが、今改めて読んでみても古くささを感じないし、やはり面白く、ある意味での共感を感じる。これは「ロボット」という「人間」の物語だからなのだろうか。また、我々は、工学的な分野に携わる者としてもう一度「ロボット工学の三原則」を考えてみる必要があるのかもしれない。

学生会 図書委員会の広場

梅田でブックハンティング

4S 村田 祐一

今年が始まってすぐ、1月13日に図書委員会では今年最初のブックハンティングが行われ、3、4年生を中心に、9人の学生が参加しました。これまで、高専の図書館にある専門書は「古すぎて使えない」「レベルが合わない」「数が少なくてなかなか借りられない」などという声が聞かれています。また、それを補う事が出来るはずのブックハンティングでも、度々「専門書を売っていない」という意見が上がっています。そこで今回は、新しい試みとして、いつもの啓林堂書店さんではなく、梅田のジュンク堂さんまで遠出をし、たくさんの本を購入してきました。

今回のブックハンティングは、専門書不足の問題を解消し、奈良高専図書館に『使える』参考書や専門書を加えるという意味があったため、買える本のジャンルは専門書のみには絞られていましたが、いつもは買えなかったような良質な専門書がたくさんあって、逆にどれがいいか迷ってしまうほどでした。いい本がたくさんあって、ゆっくりと時間をかけて欲しい本を選びました。専門書に限らず、これからもこのような機会が増えていけばいいなと思いました。

今回のブックハンティングでは、各学科の専門分野だけでなく、大学入試、編入用、一般教科、情報処理技術者などの資格試験まで、役立つ資料や参考書がたくさん入りました。これらの本は、2月から貸し出しが開始されています。

普段は本を読まないという人も、一度図書館に足を運んでみてください。本棚を見渡して、もし目についた本があれば、それはきっと面白い本のはずですから一度読んでみてはいかがでしょうか。

個人研究図書について

学生図書委員会

学生の皆さんの中で、『個人的に研究をしてみたい』と考えている方はいませんか？学生図書委員会ではそういう学生の皆さんを応援するため、個人研究用の図書を簡単な審査の上、購入する事にしました。

申し込み方法は、図書館のカウンターにある、希望図書ファイルの巻末に、専用の記入欄を設けています。そこに、研究や実験内容、学番号、学年、学科、名前等を記入してください。これを参考に簡単な面接を行い、選考をします。

すでに実施しているので、やる気のある研究者を待っています。

●最近の書棚から●

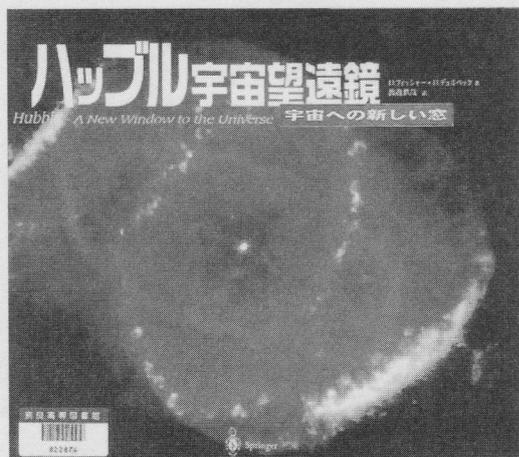
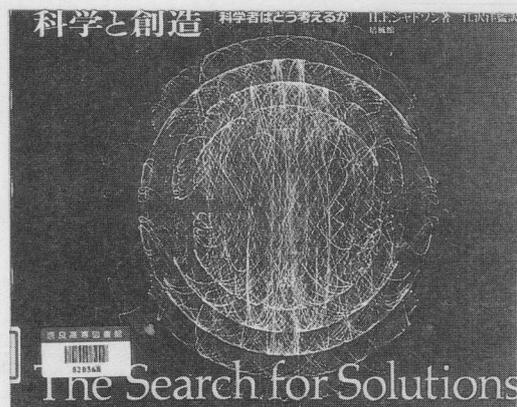
たまには専門書や参考書ではない本のページを繰って
思考の世界を拡げてみませんか？

科学と創造

科学者はどう考えるか

H.F.ジヤットソ著 (培風館)

自然科学における発見や創造の過程について、
パターン、フィードバック、モデルなど共通の考
え方がある。生物から宇宙まで、素粒子から科学
技術まで多方面から豊富な話題を取り上げてやさ
しく解説してある。科学的な思考とはどのような
ものか、是非、読んでほしい。



ハッブル宇宙望遠鏡

D.フィッシャー・H.デュルバック著 (シュプリンガー)

NASAが15億ドルの開発費用をつぎ込み、現代の
最高技術を搭載して打ち上げたハッブル宇宙望遠鏡、
高度約600kmの宇宙空間で、回折限界に近い0.05秒角
の解像力で、これまで点にしか見えなかった天体の構
造を次々と明らかにしていった。ハッブルがとらえた
天体は驚くほど鮮明で美しい。宇宙モデルの科学的検
証に大きな寄与をもたらすであろう。

空から見た地球

21世紀への遺産

ヤン・アルテュベルトラン著 (ニュートンプレス)

世界に名高い航空写真家ヤン・アルテュベルトラン
は世界の空を駆け巡り地球の姿の記録を撮った。広大
な地理的構造を一望する壮大なパノラマ、人類の文明
が地表に刻み込んだ証跡の集大成である。人工増加や
技術的進歩が自然界のバランスにおよぼした影響は、
とくにこの50年間は、あまりにも劇的であった。映像
は人間や土地の本質を突き詰め、見極めようとして
いる。人類が共有してきた豊かな自然資源という遺産
を、どうすれば保護していけるのだろうか。本文は事
実に基づいた格調の高い見識を記している。

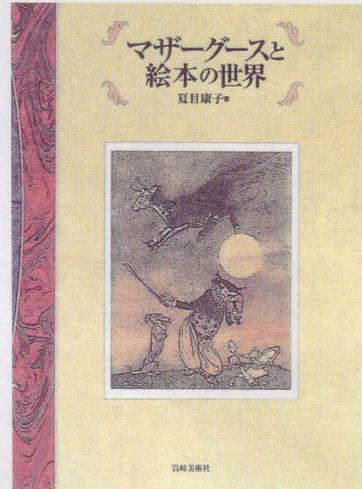
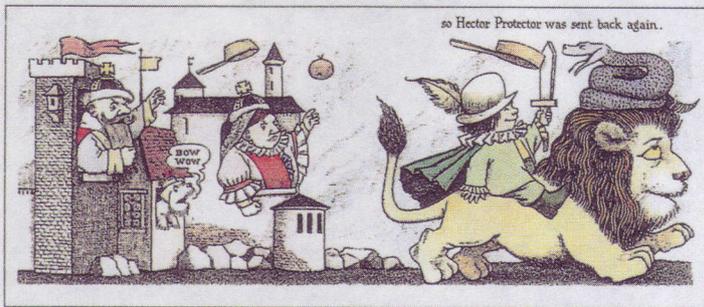


マザーグースと絵本の世界

夏目康子著（岩崎美術社）

マザーグースは童話でありながら、子供だけでなく大人も楽しむことのできる数少ない世界の一つである。時代を生き延びる強靱な生命力がマザーグースにはある。

92-93 モーリス・センダックのマザーグース



図書館からのお知らせ

☆学年末休業中の図書館利用について

- ・開館日時 3月21日（水）～30日（金）4月4日（水）～6日（金）8:30～17:00まで
夜間はありません。
- ・閉館日 4月2日（月）～3日（火） 土曜日・日曜日・祝日
- ・貸出冊数 6冊まで 3月1日（木）から冊数変更します。
- ・返却日 4月9日（月）までに返却してください。

なお、卒業予定者は卒業式当日までに必ず返却してください。もし、紛失した場合は、図書館カウンターにてご相談ください。

☆図書館改修工事について

3月上旬から6月中旬にかけて図書館の改修工事を行います。そのため、一部の書架や閲覧机等を移動したり撤去する予定です。また、工事に伴う騒音やほこり等も考えられます。何かと不便な点も出てくるかと思いますが、承知しておいてください。

なお、改修工事のための閉館は、今のところ考えておりません。6月中旬の竣工をお楽しみに。

編集後記

今号には読書感想文コンクールの入賞作品が掲載されています。入賞に自信があったのに、惜しくもかなわなかったひとは今年再挑戦してみてください。

近いうちに図書館の改修工事が始まり、少しの間不便ですが、完成すればすばらしい図書館になります。期待して下さい。
（図書館委員会）

奈良工業高等専門学校図書館 〒639-1080 大和郡山市矢田町22 TEL 0743-55-6015

URL <http://library.nara-k.ac.jp/>